

この一冊

『美土路達雄選集』美土路達雄選集刊行事業会編集

全四巻 筑波書房

山田 定市 (北海道大学)



私たちの敬愛してやまなかった美土路達雄先生が75歳の生涯を終えられてからすでに3年になる。激動する現代社会にあって、長期的展望に立った洞察がとりわけ社会科学に求められている今、美土路先生の歴史を透徹し精緻な実証に裏打ちされた学問的業績は、研究と実践の道標としていっそうその輝きを増している。

故美土路達雄先生は、農業経済学、とりわけ農産物市場論、協同組合論、出稼ぎ論、労働・農民運動論などにおいて先駆的研究業績を蓄積されると同時に、教育学においては農民教育論を中心に独自の教育論を展開し、斯学の発展に多大な貢献をされるとともに、教育・福祉論、生活論(家政学を含む)など広く社会科学の研究領域にわたってそれぞれの研究領域の嚆矢となる研究業績を世に出してこられた。

また、先生の学問的姿勢は理論と実践を統一するという立場において一貫し、先生の研究に裏打ちされた実践的な問題提起は、労働・農民運動、平和運動、教育実践・運動など社会運動、民主主義運動を絶えず励まし、先生ご自身がそのような運動の中に身をおいて運動の前進に貢献してこられた。

その業績を後世に残すべく編集されたこの『選集』は、『協同組合論』、『農産物市場論』、『労働者・農民運動論』、『農民教育・生活論』の四巻構成になっており、いずれも美土路先生の主要な研

究領域であり、いわば美土路理論の四本柱ともいえるものである。

第一巻『協同組合論』(編集担当・解題：渡辺基・神田健策)では、先生の農協論の出発点となった「農協の理論と現実」(全国農協中央会『農業協同組合』、1956年)および「協同組合の組織と経営に関する試論」(協同組合研究会『協同組合の組織と経営』、1957年)をはじめとして代表的な論稿が収録されている。

これまでの協同組合論の主流が、協同組合の経済的機能とその立論の基礎を流通過程での商業利潤の節約に求めていたのにたいして、分析の視野を生産過程にまでさかのぼり、生産と流通を統一的に把握するために“協業”概念を据えられ、わが国の農協論を大きく発展させる契機となった。

先生は、その後の議論を踏まえて「農業協同組合論についての覚え書」(北海道大学教育学部紀要)、第28号、1977年)において自説をさらに深化・発展させているが、この中で、先生は労働の社会化論と貧困化論をふまえて新たな農協論を展開している。こんにち、激動する世界情勢のもとで、協同組合の人類史的意義が再評価されつつある中で、先生の洞察の先見性に敬服の念を禁じえない。

美土路理論は、農協論と並行して農産物市場論(さらには農業市場論)として展開し、先生の学問体系における第二の峰が築かれることになる。第二巻は『農産物市場論』(編集担当・解題：宮崎宏・三島徳三)がそれにあてられている。

従来、主として商業論的立場からの市場形態論、商品学的商業技術論の枠を抜け切ることのできなかった農産物市場論を経済学的に再構築し、さらに体系化して科学としての農産物市場論を打ち立てたといえる。

その最初の体系的成果は、『戦後の農産物市場』

(1959年)に集約されており、この中で、農産物市場類型や市場編成を軸とする農業市場構造が体系的に解明されている。

その過程で、農業にかかわる市場問題を農産物市場、農業生産財市場、農民生活物資市場、金融市場、労働市場を含めた体系的農業市場論として構想され、それにもとづいて農業市場論の新たな展開が試みられるが、先生の農業市場論には「現代独占資本主義の市場問題と農民・労働者の主体的対応」という視座が一貫していたと見ることができよう。

現代社会にあって、一方では“市場の失敗”が明らかとなり、また、他方では、ロシア、東欧、中国などが相次いで市場経済に回帰するという矛盾と混迷の中で、市場経済の本質と実態に迫る美土路市場論はいつそうその輝きを増しているといえることができる。

美土路達雄先生はその卓抜した理論の体系性ととも、その中で実践的モチーフが一貫している。第三巻『労働者・農民運動論』(編集担当・解題：鈴木文熹・中嶋信)はこの主題を中心に編集されている。美土路先生の出稼ぎ研究をはじめとする一連の研究は、日本の農民出稼ぎ研究、農民労働研究の中でも一つの大きなエポックを画するものであるが、その中に貫く農民への限りない愛情とヒューマニズムは読者を感動させずにはおれない。

農業問題研究における美土路先生の諸業績は、それ自体として先見的・創造的な教育学研究としての意義を有したが、先生の教育学研究が本格化するのは、1973年、北大教育学部に社会教育講座担当教授として赴任されてからである。第四巻『農民教育・生活論』(編集担当・解題：山田定市・木村純)は、教育論と生活研究を主な内容として編成されている。

先生の教育学研究は農民教育論を主軸とする社会教育論に重点がおかれているが、その特徴は、農民教育の基礎構造分析としての農業生産力の構造分析とそれに基づく農民主体形成論に示される。

先生は、これまでの先達の業績を批判的に継承しながら、農民の労働と生活を基礎とする主体形成論として独自に展開してこられました。

その成果は先生の編著になる『現代農民教育の基礎構造』(1981年)、『現代農民教育論』(1987年)をはじめとする多くの著書・論文・研究調査報告書などに結実している。

この中で、先生が一貫して重視してきたのは、農民家族と農村女性に関する研究である。それは現実に女性にたいする差別と疎外が存在するなかで、女性の社会的自立なしにはその主体形成がありえないとの洞察にもとづいており、それはさらに生活研究に結びついている。

先生の生活研究は、先生が名寄女子短期大学学長に就任されてから本格的に展開されることになる。

その共同研究の成果は『北のくらしと家政学—地域社会の発展条件と生活研究の課題—』(1987年)として公刊された。これらの中で、先生は人間の自然的・社会的存在としての諸関連の認識のうえに立って、生活様式論を新たに構築している。

こんにち、生活問題への関心は急速に高まっていますが、美土路先生の壮大な学問体系を基礎とする人類史的視野に立った生活様式論はきわめて魅力的で示唆に富んでいる。

さて、この『選集』は、容易に入手しがたい著作を含めて先生の研究成果をあらためて体系的に整理し、その現代的意義を確認する意義を有すると同時に、斯学の発展と各分野にわたる実践運動の前進に資するところが大きいと確信する。また、この『選集』が今後の美土路達雄研究の有力なよりどころとなることができればと願っている。

『美土路達雄選集(全四巻)』、セット価格20,000円
発行所：〒162東京都新宿区神楽坂2-19銀鈴会館
筑波書房

振替口座：東京 5-39715 電話03-3265-8599